

授乳が作り出す社会関係*

——厳格な食事制限をとまなう母乳哺育を行う母親の語りと実践から——

村 田 泰 子**

1 はじめに——問題の所在

本論文の目的は、授乳、すなわち「児に栄養を与える」という営みをひとつの社会的実践と位置づけ、その実践への参与をつうじて、女性が、国家や環境、身近な他者とのあいだに保持する関係性にいかなる変容がもたらされるのかについて、社会学的に考察することである。分析の題材として用いるのは、子どもの皮膚アレルギー症状の改善を目的として、民間の相談室に通い、完全母乳哺育と和食中心の食事をこころみる母親たちの語りと実践である。

母乳哺育をテーマに女性と社会の関わりについて論じる研究は、本研究が最初ではない。母乳哺育についての既存の社会学の研究の多くが、フェミニズム的な問題関心をもつ研究者によって行われているが、ひと口にフェミニズムと言っても、立場はひとつではない。それらは大別して、母乳哺育を女性抑圧の根源とみなすものと、母乳哺育こそが女性を解放する（したがってそれを社会的に支援すべき）とするものに分けられる。

一方の、母乳哺育を女性の抑圧の根源とみなす見方は、社会学のみならず、歴史学や文学においても広く観察される見方である。多くの場合、社会構築主義的な観点から、特定の時代、あるいは特定の社会において、授乳を含む女性の「産む性」としての身体的な諸機能や能力が、国家ならびに社会の支配的な諸集団によって、そのときどきの政治的・経済的要請に応えるべく、一義的に定義されてきたことが問題にされてきた。

たとえば、日本文学者の木村朗子（2009）は、『乳房は誰のものか 日本中世物語にみる性と権力』と題された著書のなかで、中世宮廷物語においては、授乳はもっぱら乳母の役目で、乳母の乳房は母性的であると同時に性的なものとして描かれていたが、時代がすすむにつれ、仏教思想の影響などから、乳房は「母性」というただ一点において対象化されていったと論じている（木村、2009：3-8）。同様に、歴史学者の脇田晴子（2010）は、大正期、それまで幅広い階層で、乳母や子守りを雇って行われていた母乳哺育が、突如「母乳による母の育児を主とすべし」とされるようになった経緯に注目している。そのように「母乳主義」が強調されるようになった時期が、織女工らによる長時間の託児が社会問題化した時期と同時であったという指摘は興味深い（脇田、2010：95）。また、社会学者の品田知美（2004）は、1980年代に登場した「超日本式育児」ともいべき新しい育児法は、小児科学の新潮流にしたがい、抱っこや添い寝、不規則頻回授乳、長期授乳といった日本古来の育児法を再評価するもので、これが母親たちを疲弊させていると指摘している（品田、2004：131-159）。さらに、社会史家の小林亜子（1996）は、ミシェル・フーコーが性に関する歴史研究のなかで提起した「生－権力（仏語 *bio pouvoir*／英語 *bio power*）」という概念に依拠して、戦後、日本社会で、桶谷そとみらが中心となって推進してきた母乳哺育復興の取り組みとその後の展開について、つぎのような議論を行っている。1970年代、桶谷ら助産師の運動は、施設分娩化の過程でなおざりにされてきた授乳の

*キーワード：授乳、実践、生－権力

**関西学院大学社会学部准教授

問題を、女性自身の手で再定義していくという点で重要な意義を有していたが、80年代以降、その実践は、母親が家庭で行う育児を、「子どもの健康」という単一の観点からのみ評価する科学主義の育児言説と結びつき、母親をして、みずからの身体（乳房）や家族の健康の管理へと駆り立てる結果につながった（小林，1996：136-158）。

このように、母乳哺育を国家や男性による支配と結びつけて論じる立場からすれば、母乳哺育とは、女性を支配に対し、無力かつ無防備にするものにほかならない。とりわけ、母乳哺育に代わる乳児栄養の手段である乳児用粉ミルクを用いた哺育（人工乳哺育）が普及して以降は、母乳哺育を女性の抑圧とみなす見方が強まった。日本で、乳児用粉ミルクの安定的な供給体制が整うのは、1950年代以降である（林，2001：37）。乳児用粉ミルクの登場がもたらしたジェンダー的な変化について、社会学者の吉田文（2001）は、生物学的性差（セックス）と社会学的性差（ジェンダー）という概念上の区別になぞらえ、つぎのように簡潔に説明している。

子どもを産むのは女。これは今のところ男にはできない。これが生物学的性差としてのセックスである。ところで、授乳はどうだろう。確かに、母乳を与えるのは女であるが、粉ミルクでも子どもは成長する。生物学的な意味で女に固有の役割と思われがちな育児も、必ずしもすべてがそうではない（吉田，2001：115-6）。

それに対し、もう一方の、「母乳哺育こそが女性を解放する」とする立場は、医学や心理学分野を中心に蓄積されてきた、母乳児と粉ミルク児の発達に関わる、多種多様の疫学的データに依拠して主張される。彼ら／彼女らが主張するところによれば、母乳と粉ミルクのあいだには、決して乗り越えることのできない、決定的な差異が存在している。すなわち、母乳のみがもつとされる、乳児の健康にまつわるもろもろのプラスの効用である。そうした効用は、免疫面での効用から知能・認知能力、心理面での発達における効用まで、多岐にわたっている（NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編，2012：68-73）。乳

児だけでなく、母親にとっても、母子のきずな形成や授乳による無排卵期の避妊法、体重減少、乳がんの予防など、健康上のさまざまな利点があると主張されるのは、近年の新しい傾向である（NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編，2012：81-88）。

このように、母乳哺育の乳児の発達における科学的な優位性を根拠に、母乳哺育を行う権利を女性の権利として確立すべきと主張する言説には、いくつかの位相がある。ユニセフや WHO といった外的な権威や指標を引合いに出し、国際的に合意された普遍的な善として母乳哺育の意義を語るのは、ひとつのポピュラーなやり方である。ユニセフ事務局長代理のリチャード・ジョリーは、「[母乳育児こそ最良（Breast is Best）]という格言ほど世界中で無条件に支持されているものはない」（ボウムスラグとミッチェルズ，1999：iii）と明言してはばからない。しかし、現実の社会における母乳哺育の受容のされかたは、これらの書物において宣言されているよりも、はるかに不確かで、曖昧である。管見のかぎり、時代を問わず、また洋の東西を問わず、母乳哺育が、あらゆる女性にとって、無条件に幸せなものとして経験された社会は、いまだかつて存在したことがない。

別の一角には、実際に母乳哺育をしている母親、もしくは現場で母乳哺育の支援に携わる専門家（助産師や母乳哺育コンサルタントなど）によって編まれた書物がある。これらの書物は、普遍的善としての母乳哺育ではなく、個別の経験としての母乳哺育について、より多くのことを教えてくれる。たとえば、母乳育児サークルという団体が刊行する『おっぱいだより集』や『続 おっぱいだより集』という書物には、全国の会員からのお便りとして、母乳で育ててよかったという声や、母乳哺育をつうじて母親としての自信や満足を得たという声が、多数紹介されている。また、実際に母乳で育ててみて、適切な時期に適切な支援があれば、母乳哺育は決して困難ではなかったという指摘も多くみられる（母乳育児サークル編，1986・1997）。

ただし、これらの書物もまた、多くの場合、母乳哺育を推進する立場から書かれているため、推

進につながらないような情報は語られない傾向にある。厚生労働省の統計によれば、日本では、じつに96%もの母親が、妊娠中から母乳で育てることを希望しているというが¹⁾ (厚生労働省, 2007: 7)、生後三ヶ月の時点で、実際に母乳だけで育てていると答えた母親の割合は、4割に満たないという (厚生労働省, 2007: 5)。残りの6割の母親の経験は、誰によって光が当てられるのだろうか。また、根ヶ山光一が行った、日仏英の授乳・離乳に関する国際比較調査によれば、日本においてのみ、母乳の不足を理由に早期に母乳哺育を終了した母親において、自身の哺乳に対する満足度が有意に低く、人工乳を (ある意味不合理なまでに) 合理化する態度がみられたという (根ヶ山光一, 2010: 66-67)。なぜ日本でのみ、母乳哺育の「つまづき」が、母親のところにこれほど大きな傷を残すのか。日本はしばしば母乳礼賛の社会と言われるが、母乳哺育や、それを推進する実践がもつ、ある種の抑圧性や排他性についても、考えてみる必要がある。

問題は、現状において、これら二つの立場が過度に対立的なものと捉えられ、あたかも女性たちのあいだに、「母乳派」と「反母乳派」の対立が存在するかのようにみなされていることである。わたし自身、学会や研究会で母乳哺育をテーマにした報告を行うとき、あるいは現場で調査を行うとき、「あなたはどちらの立場ですか？」という立場表明を求められ、戸惑った経験がある。わたしの立場を取って言葉にするなら、わたしは、両方の立場に関心があり、いずれか一方だけでは不十分であると考えている。別の言い方をすれば、自分の研究をつうじて、いずれか一方の見方だけをしているのでは見落とされてしまいがちな、「あいだ」にある問題を明らかにできたらと考えている。

前置きが長くなったが、上記のような問題意識をもって、前稿 (村田, 2013) に引きつづき、兵庫県尼崎市で35年間にわたり母子の支援をつづ

けている「F 母乳育児相談室 (以下、相談室と略す)」で調査をさせていただいた。本稿で取り上げるのは、相談室に通う母親のなかでも、とくに、子どもの皮膚アレルギー症状の改善を目的として、助産師の指導のもと、食事改善と完全母乳哺育とをセットで行う母親たちの実践である。この相談室では、「食べたものが母乳に出る」という考え方のもと、単に母乳を与えるだけではなく、母親が、可能な限り出所の明らかな食材を食べ、「質の高い母乳」を与えることを目標としている。また、日々の食事日誌などの取り組みをつうじて、母親自身が、子どもの症状をコントロールできるようになることを目指している²⁾。それは、言う間でもなく、徹頭徹尾、母乳を推進する立場に立ってなされた実践であるが、乳児の健康を願って取り組まれるその実践をつうじて、母親たちが国家や環境、身近な他者とのあいだに築く関係性には、つぎのような多義的な変化がみられたことを指摘したい。

すなわち、その実践は、第一義的には、政府による授乳期の母子への支援がきわめて手薄な現状にあって、個々の家庭でばらばらに子育てをしていた母親に対し、ある種の「実践共同体」ともいえるべき場を提供する役割を担っていた。ただしまた、その同じ実践への参加をつうじて、母親たちは、別種の支配に身をゆだねることを余儀なくされていた。別種の支配とはすなわち、「生-権力」的なものを、みずからすすんで受け入れていくことに他ならない。詳しくは4章で論じるように、その実践においては、子どもの身体的健康の管理がより効率よく行えるよう、さまざまな具体的テクノロジーや語彙が用いられていた。以下の分析では、ひとつの実践が有する、これら複数の作用に注意を払いつつ、母親たちの実践や語りの分析を行いたい。

加えて、分析に当たっては、実際にともなう固有の排除にも目を向けたい。それが母乳哺育を基とする実践である以上、あらかじめ一方の性 (男

1) 「母乳で育てたい」と答えた者の内訳は、「母乳が出れば母乳で育てたいと思っていた」(52.9%)、「ぜひ母乳で育てたいと思っていた」(43.1%)となっている (厚生労働省, 2005)。

2) 相談室の活動の詳しい中身については、鮫島 (2013) を参照されたい。鮫島は、相談室の実践を、「支援者が母親を管理的姿勢で支援するのではなく、支援者が母親に寄り添いながら、現場を共有し、両者の溶け合う関係を通じて支援する」事例として捉える視点を提起している (鮫島, 2013: 114)。

性)が排除されているのは仕方のないことであるが、女性であることは、じつはその実践に参加するための十分条件ではない。当該の実践においては、誰が、どのようにして排除されていたのだろうか。

このように、ひねくれた、わかりにくい(その自覚はある)問題意識をもって調査を願い出たわたしを、異質な他者として排除することなく、大きな心で受け入れてくださった、相談室を主宰する福井早智子先生と相談室のみなさまに、感謝を申し上げたい。草稿の段階でいただいた厳しくも温かいコメント、そして福井先生が主宰してくださった、今回の論文のための勉強会なくしては、この論文は今よりもっと不十分なものとなっていただろう。

2 調査について

本論に入るまえに、調査の概要を説明し、扱うデータの代表性の問題について検討しておくたい。

2-1 調査の概要

調査は、2009年11月25日から2012年8月30日にかけて、兵庫県尼崎市にある、F母乳育児相談室において実施した。

調査方法は、参与観察と聞き取り調査を組み合わせで用いた。調査は大きく分けて、つぎの3つの部分からなる。

- (1) 2010年度から2012年度にかけて、わたしが大学で担当する「ジェンダー論」の講義に、福井先生と相談室に通う母子数組に、ゲストスピーカーとして来ていただいた。母親たちは順番にマイクを持って、用意してきた原稿を読み上げるかたちで、母乳哺育を軸とする子育ての体験談を語ってくれた。
- (2) 相談室で断続的にフィールドワークを実施するかたわら、母親の聞き取り調査を行った。人数

は(1)と(2)合わせて31名で、複数回話を聞いた人もいる。

(3) これまでに話を聞いた母親のなかから、本稿の問題意識との関連で、とくに興味深い話をしてくれたOさんとMさんの、より重点的な聞き取り調査を行った。Oさんの調査は2012年8月に、相談室で、2時間ほどかけて行った。Mさんの調査は2014年2月に、Mさんの自宅で、2時間の調査を二度、行った。本稿での議論は、主にこの二名の語りに依拠してすすめる³⁾。

2-2 代表性の問題について

つづいて、Oさん、Mさんの語りの代表性について検討しておくたい。Oさん、Mさんの語りは、現代社会で乳幼児を育てる母親全体を代表するものではない。

Oさん、Mさんの基本的属性を確認しておけば⁴⁾、まず、Oさんは、神戸市在住で、年齢は30代半ば、結婚していて、子どもは2歳2ヶ月の女の子が一人いる。夫は会社員である。住居は完全二世帯の作りの戸建てに、夫の両親とともに暮らしている。夫の両親とは、毎晩夕飯は一緒にとるなど、頻繁に行き来がある。Oさんは高校を卒業後、化粧品販売の会社で働いたのち、結婚を機に退職した。その後、就業はしていない。Oさんの人柄は、派手ではないが、誠実さの感じられる人柄である。聞き取り調査でも、言葉を選びつつ、ゆっくりと話をし、真意が伝わらなかったと思ったときには、「さっきの話ですけど」と戻って言い直すなどして語ってくれた。

つづいてMさんについて、Mさんは、大阪市在住で、年齢は30代後半、結婚していて、子どもは10歳と2歳の男の子がいる。夫は教員で、住居はMさんと夫、子どもたちの4人で、郊外の戸建てに暮らしている。同じ町内に、Mさんの実母も暮らしており、頻繁に行き来がある。Mさんは大学を卒業後、地元の公立幼稚園で教諭として働いたのち、結婚、結婚後もしばらくは仕事

3) 草稿を書き上げた段階で、先生とOさん、Mさんに読んでいただき、先生とMさんからは、それぞれ電話で長大なコメントをいただいた。さらに、2014年10月29日には、先生がOさん、Mさんほか数名の母親を集め、本論文に応えるかたちで、勉強会を開いてくださった。

4) 個人が特定されないよう、Oさん、Mさんの名前はともにイニシャルで記し、年齢その他のデータにも、若干の加工を施している。

をつづけたが、「自分の子どもは自分でちゃんと育てたい」と考え、退職した。現在は自宅で週4日、1日1時間程度、近所の子どもたちに音楽を教えている。Mさんの人柄は、いつも笑顔を絶やさない、穏やかな人柄である。Oさん同様、穏やかさのなかにも、誠実さや芯のつよさを感じさせる人柄である。

こうしてみると、OさんとMさんには、いくつかの共通点があることに気づく。まず、家族の形態について、両者はともに、きわめて標準的な形態の家族を営んでいる。標準的とはすなわち、夫婦が籍を入れ、同居していること、また、夫婦のあいだで性別役割分業がスムーズに成り立っていること、学歴階層が高いこと（Oさんは高卒、Mさんは大卒とひとくくりにすることはできないが、Oさんの夫が大卒、Mさんの夫が大学院卒で、夫婦としては高学歴層に属しているといえる）、経済階層が高いこと（年齢階層が高めで、夫が安定したホワイトカラー職に就いていること、戸建ての持ち家に居住していることなどから判断して）、子どもがいることなどを指している。家族社会学者の神原文子は、「標準家族」という概念を用いて、そうした家族は、単にかたちが標準的であるだけでなく、当該の社会システムにおいて、市民としての諸権利をもっとも十全に行使することのできる、多数派で、かつ有利な立場にある家族であるという指摘を行っている（神原，2010：181-186）。Oさん、Mさんの語りの分析に当たっても、それがある意味特権的な、恵まれた立場にある女性の語りであるという自覚はもっておく必要がある。

加えて、母乳哺育をつづけていくうえで、絶対不可欠ではないが、あればプラスになると考えられる、ある種の文化資本の問題にも触れておく必要がある。文化資本については多くの研究がある

が、ここでは、クラシック音楽や美術館、博物館などのいわゆる「高級文化」への接触頻度という意味ではなく、子ども時代、育った家庭において、母親など養育者がやっていた家事や育児のやり方に関連する概念として用いることとしたい。Oさんは、幼少時より、母親が、食品添加物は体によくないと言うのを聞いて育った。外食もほとんどすることはなかった。同様に、Mさんも、子ども時代、母親が、化学調味料を使わない食事を作るのをみて育った。母親は、お金がかかるのでいつもというわけではないが、自然食の宅配を取ったり、牛乳もなるべく低温殺菌のものを選んで買ったりしていた。

こうした母親の姿をみて育ったOさん、Mさんは、将来、母乳で子どもを育てるのに必要な文化資本を、知らず知らずのうちに受け取っていたことができる。それを言葉で表現することは難しいが、言うなれば、産後、母乳で育てることを当たり前のことと感じ、少々のことであっても母乳で育てられるはずだという確信のようなものを与えてくれる、そんな何かである⁵⁾。

したがって、わたしたちは、母乳哺育においていわばエリート的立場にあるOさん、Mさんの語りを、何か、現代の母親全体を代表するもののように捉えるべきではない。ましてや、Oさん、Mさんが実践したことを、他の母親も実践できるはずであるとか、すべきであるといった議論のために動員されるべきではない。

代わって、本稿では、Oさん、Mさんの語りや実践を、より限定的に、つぎのような関心のために役立てることとしたい。わたしは前稿「母乳哺育と後期近代のリスク——環境問題のリスクを中心に」（村田，2012）と「授乳の医療化とジェンダー——「母乳ダイオキシン騒動」と助産師の実践知」（村田，2013）において、現代日本社会

5) 初回フィールドワークを行った日、相談室で出会ったIさんも、そうした意味での文化資本を多く持っていた一人である。Iさんは年齢が19歳と、相談室に通う母親たちのなかでは際立って若かった。Iさんは、いわゆる「できちゃった結婚」で母親になり、服装や化粧、言葉遣いの点などでほかの母親とは異なる雰囲気をもっていたが、尋ねてみると、子ども時代、母乳で育てられていたのに加え、下に弟と妹が生まれたときには、母親に連れられ、こちらの相談室に通っていたという。そのようにして育ったIさんにとって、母乳哺育は、「ちょっと頑張ればできる」はずのものだった。またIさんは、何か困ったことがあったときには、このような場所で支援を求めることができるのだということも知っていたのである（2009年11月25日のフィールドノートより）（cf. 福井，2010a・2010b・2010c）。しかしまた、Iさんが相談室に通った期間は短く、二度目の聞きとりは実現しなかったことも書き添えておかねばならないだろう。

で乳児を育てる母親が直面する問題のひとつとして、ダイオキシン類や放射性物質などの化学物質に代表される環境問題のリスクが浮上していることを指摘した。この新しいリスクは、身の回りの水や空気、土壌などとともに、乳児にとって「最善」であるはずの母乳までも、潜在的に汚染された物質に変えたと言われる。そうした状況への対処は、現状では、ほぼ個人の努力に任されており、知識や情報へのアクセスがより容易な階層の母親ほど、高い危機感を持っていると言われる。O さん、M さんの語りと実践は、そうした問題状況に対する母親たちの対処の、先鋭的な形態のものとして分析することが可能である。

3 相談室に通い始めたきっかけ

ここからはいよいよ、O さんと M さんの語りをもとに分析を行っていきたい。はじめに、相談室に通い出したきっかけと、相談室を訪れる前後で、O さん、M さんの母乳哺育に対する意識がどのように変化したのかを確認したい。

まず、O さんについて、O さんが相談室を訪れたのは、子どもが生後4ヶ月のころ、同居している夫の父親に「(乳房マッサージが)健康にいいから」と勧められ、軽い気持ちで訪れたのが最初であった。それまでも自己流ではあるが、自宅で母乳のみで子どもを育てており、母乳のことで取り立てて困っていることはないと感じていた。O さんにとって、子どもを母乳で育てることは当たり前のことで、特別に努力や支援を要することだという意識はなかった。O さんは当時の心境を、つぎのように語っている。

おっぱいが出ないということが、わたしにとっては全然わからない世界で、要は当たりまえだと思っていたし、おっぱいを飲ませるのも当たりまえだと思っていた。なんでわざわざ粉ミルクを買ってあげるのかっていう、そのへんのところがぜんぜん変に理解していなくて、考えたこともなくて。だから、逆にマッサージがいいと言われても、別に出ているのに、出るのが

当たり前なのになんでわざわざマッサージに行かなきゃいけないのっていうくらいの気持ちで。⁶⁾

このように、相談室を訪れるまでは、O さんにとって、母乳哺育の実践は、食生活をはじめとする生活全般の改善や、その先にある、母親としてのアイデンティティの変容には結びついていなかった。換言すれば、O さんは他の多くの母親同様、ただ漫然と母乳を与えるにとどまっていたのである。

ところが、相談室を訪れ、先生から、あっさりと「アトピーね」と言われたことで、O さんの気持ちに変化が生じている。相談室を訪れる少しまえ、O さん自身、子どもの肌の調子がわるいのを気にして、小児科を受診したことはあった。たまたま年末年始ですき焼きがつづき、生卵を一食に2個割って食べたりしていたところ、子どもの肌の調子が急に悪くなり、あわてて受診した。このときの医師の診断は「乳児性湿疹」で、心配していた食事については、「(母親の食べ物)全然母乳からは出ません」と言われ、安心して家に帰ったという。

最初、アトピーと告げられたとき、O さんは大きなショックを受けた。アトピー性皮膚炎という、原因が不明の、非常に苦勞する病気というイメージがあったからである。しかし、相談室では、単に病名だけを宣告して終わるのではなく、「アトピーの子は賢い」、「アトピーの子はいろいろ勉強させてくれる」などと、病気を肯定的に捉える見方が示され、さらには、食事を変えることで体をきれいにしていけるという、相談室の実践の根幹をなす考え方が示された。O さんは、このときの気持ちの変化を、つぎのように振り返っている。

病院に行けば、結局それ(注：アトピー性皮膚炎)がダメなものだから、何とかそれをなくそうなくそうとして、薬をつけたり、排除していく方向になっちゃうんだと思うんですけど、ここだと、それをプラスに変えて、実際食事を変

6) 2012年8月30日のフィールドノートから。

えていけば体もきれいになっていくよとか、そういう先が見えるというか、先が明るく見えるようなイメージというか、そんな感じに考えられるようになりましたね。⁷⁾

つづいて M さんについて、M さんは、二人目の子どもが3ヶ月のときに初めて相談室を訪れた。きっかけは、自身の乳腺炎だったという。乳房にたくさんのしこりができて、痛み、子どもも飲みたがらなくなった。M さんは、一人目の子どものときには母乳哺育にあまりこだわりがなく、生後10ヶ月で何となくやめてしまったが、二人目のときには納得のいく母乳哺育をしたいとつよく希望していた。乳腺炎について、出産した助産院でも支援は得られなかったため、仕方なくネットや本で調べてマッサージを受けたり、冷やしたりといった対処療法をこころみていた。そうしたときに、実母が知人から福井先生の本を借りてきて読み、「こんなところがあったんだ」と興味を抱き、訪れたという。

M さんの場合、相談室を訪れるまえから、子どもが皮膚アレルギーであるという自覚があった。悩みは、母乳哺育と皮膚アレルギーの治療が、どうやら両立できそうにないことだった。M さんの夫がアレルギー体質で、一人目の子どもも、3歳のときに病院でアトピー性皮膚炎と診断されて以来、治療をつづけていた。二人目の子どもも、生後まもなくから肌のかぶれが始め、生後3ヶ月のとき、M さんがマンゴープリンを食べたのをきっかけに、症状が急激に悪化した。そのとき M さんは、これは単なる乳児性湿疹でなく、「アレルギーの出方」だと確信したという。

M さんは、二人目の子どもの皮膚アレルギーについては、相談室に通い始めるまえ、漢方医のもとで治療をこころみていた。この漢方医は、母親の食べたものが母乳をつうじて子どもに行くという考えから（その点、相談室の考えに似ている）、母親である M さんに漢方薬を処方していた。食事に関しては、そのつど、こういうものは食べたほうがいい、食べないほうがいいなどの助言がある程度だったという。そうした治療方針に

対し、M さんは、「これで本当にいいのだろうか、母乳自体がアレルギー源になっているの难道うしよう」と、漠然と不安な気持ちを抱いていた。M さんは、相談室を訪れ、食事と母乳、皮膚アレルギーのつながりと、具体的な食事改善の方法について説明を受け、すこぶる納得できたので、やってみることにしたという。

このように、相談室を訪れる時点で、個々の母親が子どもの皮膚アレルギーの問題を自覚している度合いはさまざまだが、相談室を訪れ、食物と母乳、皮膚アレルギーのあいだのつながりと回復への道筋を明確に示されることで、両者はともに前向きな気持ちに切り替わっていった。むしろ、この時点で、自分にはできない、興味がないと去っていく母親もいる。O さん、M さんが先生の説明をすんなりと受け容れ、やってみようという気持ちになれたのは、決して偶然ではなく、先に触れた文化資本の問題や、経済的・時間的に恵まれた現在の育児環境も関わっていただろう。

4 相談室での実践と「生一権力」

つづいて本節では、相談室で行われている実践の、具体的な中身について考察していきたい。

相談室での実践は、乳房マッサージにせよ、食事指導にせよ、基本的には個人を単位に行われる。とくに食事指導に関して、子どもの体質や皮膚アレルギーの症状はそれぞれ異なるし、母親の性格もまた一様ではない。相談室では、それを孤独な取り組みに終わらせないため、さまざまな仕掛けが用意されている。以下では順に、相談室という場がもつ力（4-1）、そこで用いられる具体的な技術（テクノロジー）（4-2）と修辞法（4-3）について、考察していきたい。そのうえで、母乳哺育と皮膚アレルギーの改善という共通の目標に向かって、先生と母親がともにつくり上げるその実践には、同時に、「生一権力」的な側面が存在していることを指摘したい。

4-1 相談室という場の力

まず、相談室という場がもつ力について考察す

7) 同上。

る。

相談室では、予約は完全予約制ではなく、敢えて時間を明確に指定しないスタイルを取っている。これは、教室を主宰する先生の考えで敢えてそうしているもので、母親たちが朝早くから来て、たむろしながら順番が回ってくるのを待つ様子は、産婆の時代の伝統的な授乳慣習（小林，1996：148）に似ていなくもない。マッサージを受ける順番は、子どもの容態や月齢、指導の内容などにより、先生が決める。その場にいる母親が、「つぎは誰々ですよ」と進言することもある。

Mさんが、初めて相談室を訪問したときの第一印象は、「人がいっぱいいるな」というものだった。Mさんは最初、何回か通ったら終わると思っていて、まさか自分が週2回、2年間近く、通うことになるとは思っていなかったという。乳腺炎の症状がひどいときには、週に4回、通ったこともあった。

Mさんの相談室での滞在時間は、朝9時半に教室が開いてすぐから、午後2時か3時ごろまで、平均してだいたい5、6時間である。朝はたいてい、Mさんの実母が先に相談室に行き、順番が早くまわってくるよう、場所とりをしてくれる。上の子どもの習い事など用事があるときには、先生に断って、早めに帰らせてもらうこともある。

このように、相談室で長大な時間を過ごすことについて、Mさんは、「生活そのもの」、「もう完全に仕事しているぐらいの状況」と表現している。実際、相談室で、母親は子どもに授乳もするし、おむつも替える。子どもに昼寝もさせるし、少し大きくなると、よく会う母子同士で、子どもを遊ばせたりもする。みなが同じ考えのもと、育児をしているから、いろいろなことを説明しなくてもわかってもらえるのがラクだとMさんは語っている。逆に言えば、そのように母子が長い時間を過ごす相談室は、普段の家庭での子育てがそのまま「曝け出」される場でもあると言える（鯨島，2013：118）。

Oさん、Mさんにとって、相談室の最大の魅力は、そこに蓄積された、過去35年間の経験であるという。たとえば、乳腺炎など特定の話題に際して、先生が、経験のある母親に、「あんたから話してやって」と話をふることは多い。母親も心得たもので、ちょっとした改善のための工夫など交えつつ、自分の経験を非常にうまく語ってみせる。あるいは、食事改善をしてもすぐには効果が出ず、くじけそうになっている母親には、「あの子もそうやってんで」と、すでに快癒して、元気になった子どもの姿をみせ、勇気づけることができる。この点について、Oさんは、「先輩からライブで聞ける」こと、「昔のお母さんたちがちゃんと調べて大丈夫やったからって言える」ことが、相談室の最大の魅力であると述べている。Mさんも、「みんな、早く帰りたいと思うことはあっても、学ぶこともいっぱいあるので、長いでもいいと感じてるんだと思います」と語っている。

4-2 二つの技術（テクノロジー）

このような、場そのものがもつ力に加え、相談室では、つぎのような具体的な技術（テクノロジー）を用いて、母親たちの実践への参与を促している。

相談室の食事指導の基本は、お米や雑穀、野菜、海草といった日本古来の食材を使って、家で手作りすることである。手作りにこだわる理由は、出所の明らかな食材を厳選して使用することで、単にアレルギーの発生が抑えられるというだけでなく、子どもに症状が出た際に、母親本人が、何が原因であったか、突き止めることができるようになることを重視するためである⁸⁾。食材の種類としては、アレルギーを引き起こす可能性が高いとされる肉や卵、小麦、乳製品、油は極力とらないことが推奨される。調理法としては、蒸す、煮るなどのシンプルな調理法が中心となる。子どものアレルギー症状が激しいときには、いったん食材の種類や数を大きく制限したうえで、少

8) 相談室では、一般的に病院で行われている、アレルギー検査（血液検査と皮膚検査）の結果も参考にしながら、上記の食事療法を行っている。血液検査の結果が陽性でも、食べて反応が出なかったり、逆に陰性でも、つよい反応を示したりするケースは多々あるといい、そうした個別ケースに対応できるのが、上記の方法の強みである（福井，1992：70）。

しずつ増やしていきながら症状の出方を観察するという方法をとるが、相談室に来たばかりの母親にとっては戸惑うことも多い。そのため相談室では、母親たちが考案したレシピを集めた、『アトピーっ子にしない 母乳育児 BOOK——アトピーに負けない丈夫な体をつくる ヘルシー・ッキングがいっぱい!』（福井，1992）を出版するなどしてレシピの紹介に努めているが、それにも増して効果的なのは、相談室で使用される、つぎの二つの技術である。

第一の技術は、お弁当である。相談室では、はじめて教室にくる母親には、着替えとおむつ、お尻拭き、タオル、水筒とともに、「おにぎり」を持ってくるよう、声かけがなされる。昼どきになると、教室にいる母親たちは、ミニテーブルや床など、空いたスペースで、それぞれに自宅から持参したお弁当を広げる。はじめて来た母親は、自分の持参したおにぎりや、先輩たちのおにぎりやお弁当を見比べ、違いに気づくという仕掛けである。同じおにぎりであっても、先輩たちのおにぎりは、きびやあわ、ひえなど雑穀が混じった黒いおにぎりだったり、玄米であったりする。

写真1は、聞き取り調査を行った日、Oさんが持参していたお弁当である。雑穀の混じったおにぎりや、根菜に味噌とトマトで味をつけたラタトゥーユ、それに、手前に見えているのは、れんこんを使ったオープン焼きである。お茶は番茶を持ってきた。番茶には殺菌作用があり、母親たちは、番茶を入れたタッパーに脱脂綿を浸して、子どものお尻拭きとして使っている。

このように、相談室では、お弁当をはじめ、育児法もみなで同じ方針に従ってやることが多い。それについて、Oさんは、「一人でいると、何を作って、どれぐらい食べさせたらいいのか、いちいち考えなくちゃいけないけど、ここでみんなのやり方を見ていれば、悩まないで済むし、いいところは真似ができるのがいい」と語っている。

相談室で用いられるもうひとつの技術は、食物日誌である。相談室では、病院で受ける血液検査や皮膚検査の結果も参考にしうえて、母親本人がよく「観察する」ことを重視した指導を行っており、そこで用いられるのが、食物日誌である。食物日誌は、見開きで、一週間分の食事（食材）



写真1 Oさんのお弁当

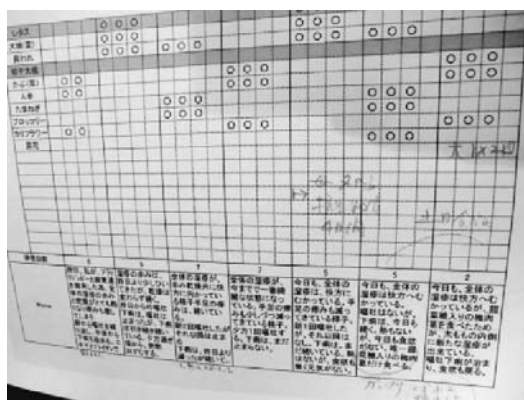


写真2 Kさんの食物日誌

と子どもの症状が書き込めるようになっている。写真2は、ある日のフィールドワークで、母親（Kさん）から見せてもらった実際の食事日誌である。食べた食材に○がつけられ、下段には、子どもの症状の変化が、「全体の湿疹が、今までで一番綺麗な状態になっている」、「今日も、全体の湿疹は快方へむかっているが、甜菜糖入りの梅肉葛を食べたためか、太ももの内側に新たな湿疹が出来ている」などと書かれている。中段、手書きで記入されているのは、先生のコメントである。

4-3 「母乳は嘘がつかない」——授乳と生一権力

つづいて、教室でしばしば用いられる、「母乳は嘘がつかない」という修辞法（レトリック）を取り上げ、考察しておきたい。

「母乳は嘘がつかない」という言い方は、相談室では、主としてつぎの二通りの文脈で用いられる。一つ目は、先生が、乳房マッサージを施す際

に、母親が前日に摂取した食べ物と母乳の質とのつながりを問題にする文脈である。母親が前日に「よい食べ物」を食べ、きちんと三時間おきに授乳をしていれば、母乳もさらさらした、よい母乳が出るが、母親が「わるい食べ物」を食べ、授乳間隔をいい加減にしていれば、母乳もそれなりの状態になるので、すぐに先生にばれてしまうのだという。

二つ目は、食事指導のためのカウンセリングにおいて、やはり、母親が前日に摂取した食べ物と子どもの症状のつながりを問題にする文脈で用いられる。上と同じく、母親が前日に「わるい食べ物」を食べると、子どもの肌にてきめん、症状が現れるので、母乳は嘘がつけないということになる。

このように、母乳をつうじて、自身の家庭での食生活の中身が、先生に対し、筒抜けになってしまうことについて、Oさんはつぎのように語っている。

先生の言うとおりにしないと、ここに来れなくなるといったんです。それと、すぐばれるっていうのは、すぐわかるんですね。先生が何でもお見通しということがすごくわかったので、嘘をつけない。嘘をつけないということは、言うとおりにするしかないし、そんな状況です。⁹⁾

このOさんの語りは、相談室の実践にひそむ両義性をよく言い表している。相談室の実践は、言うまでもなく、母乳哺育への支援を第一義的な目的としている。その出発点には、助産師として、子どもたちに一滴でも多く母乳を飲ませたいという先生の思いがあり、そうした先生の思いと、母乳で子どもを育てたい、子どものアトピー性皮膚炎を治したいという母親の思いが結びつき、相談室においてはある種の実践共同体ともいえるべき世界が作り上げられている。そこで使用されるお弁当や食物日誌などの技術や「母乳は嘘がつけない」という修辞法は、個々の母親を、共同体で行われている実践にスムーズに参加させ、

一人では解決できなかったであろうもろもろの課題を、対処可能な課題へと変換するのに役立っていた。

しかし、その一方で、個々の母親は、実践への参加をつうじて、同時にもう一つのことを行っていたとみることができる。もう一つのことはすなわち、それまで個々の家庭で、ばらばらに、また漫然と行ってきた食事や授乳といった営みを、公的な明るみの下に引き出し、乳児の健康という画一的な価値へと隷属させていくことに他ならない。

それは、フランスの歴史家ミッシェル・フーコーが提起した、「生－権力」と呼ばれる権力作用を想起させる。生－権力には、「規律訓練型権力 (disciplinary power)」と「生の政治 (bio politics)」の二つの局面がある。規律訓練型権力とは、監獄や学校、病院といった国家の諸制度をつうじて、生徒や患者の身体が、厳格な時間割や立ち居ふるまいのルール、絶えざる監視といった技術によって管理され、従順な身体へと変えられることを意味している (フーコー、1977)。他方、生の政治においては、出生率や罹患率、妊娠率、寿命、健康状態といった内的な規準をつうじて、諸個人の身体や健康についてできるだけ多くの情報を収集し、積極的な配慮の対象としていくことが目標とされる (フーコー、1986: 35)。

こうした権力作用は、もちろん、相談室の実践に固有のものではない。近代国家の最重要な課題のひとつは、その成員の健康を気遣い、社会空間内に有効に配置・活用していくことにほかならず、フーコーも論じたように、病院や学校といった国家の諸制度はより明確にそうした目的に奉仕している。ここで確認したいのは、授乳という領域において、国家による支援の不在を埋めるべく、助産師と母親が創意工夫してつくり上げている実践もまた、そうした権力作用から完全に自由ではないというその事実である。

5 別種の能動性の可能性

分析の最後となる本節では、ふたたびOさん、

9) 同上。

Mさんの語りに戻り、Oさん、Mさんが実践への参与をつうじて獲得した、ある種の能動性に目を向けたい。

前節でみたように、相談室の実践には母子の身体を個別に管理し、国家の諸目的のために役立てていく側面があったが、Oさん、Mさんが実践への参与をつうじて獲得したものは、フーコーが論じたような、支配を待ち受けるだけの従順さとは別物であったように思われる。下記では、Oさん、Mさんが、実践をつづけるなかで獲得した二種類の変化——化学物質のリスクの制御と、食事改善の苦労の消失——に注目し、考察をこころみたい。

5-1 化学物質のリスクを制御する

Oさん、Mさんが、相談室を訪れる以前、食事にまつわる不安を抱えていたことはすでにみたとおりである。

Oさんは、2年間あまり相談室に通いつづけるなかで、そうした不安が徐々に軽減され、安心感に変わったと語っている。Oさんは、相談室での実践から得られる安心感を、病院でのそれと比較し、つぎのように語っている。

ここに来ると、来るだけで安心する。子どもが熱が出ていて、病院に行っても得られる安心感と、ここで得られる安心感と、それぞれあって。やっぱり、病院の先生に診てもらって安心するっていうのも大事なことですけど、もっと根本的なところでの安心感は、ここで得られる。¹⁰⁾

「もっと根本的」とはすなわち、いまや母親であるOさん自身が、さまざまなことを自分で判断できるようになったということを意味している。そのことを示す、ひとつの興味深いエピソードがある。Oさんは、あるとき、子どもの肌の症状が急激に悪化したことがあった。Oさんは、食物日誌に照らし、すぐにこれは食べ物が原因では

ないと確信した。そうして生活のなかで考え得る化学物質をひとつひとつ検討した末、前日に、夫の父親が床にかけた抗菌性ワックスに思い当たったという。

「かけた？」って聞いたら、「かけた」って言われて。抗生ワックスで、ちょうど皮膚が汚くなったその日だったんですね。だからもう、間違いないって。ちょうどハイハイをしている時期だったんで、これはもう間違いないって思ってた。¹¹⁾

Oさんによれば、このように、原因をつきとめることはひとつの段階で、つぎに、原因を取り除くべく、相手に伝えるという段階が待ち受けている。この、相手に伝えるという作業が、じつは一番難しいのだという。

(原因がわかって) そこからが、言うっていう作業に入るんですよ。それは身内であっても、言いにくい関係であっても、言わなきゃいけない。もう、直接、ワックスは化学物質だからアトピーの子には良くないって。¹²⁾

ワックスがけのほかにも、Oさんが、生活のなかで、家族や夫の父親に、伝えなければならないと感じる場面は多々あった。食事制限のため食べられる食材の種類が著しく制限されていた当初、二世帯同居をしている夫の母親に、夫の分の食事を作ってくれるよう、お願いしたこともそのひとつであるし、夫の父親に、農薬の使用をやめるよう頼んだこともそのひとつである。夫の父親は自宅の庭で野菜を育てており、長年、農薬を使っていた。そのことについて、どう伝えるべきか悩んでいたとき、先生から、「親のあんたが守ったんな、誰がこの子、守ったんねん！」と言われ、伝えることを決意したという。

伝えるに当たって、Oさんは、よく考えた末、ただやめてくれと言うのではなく、代替え案とセ

10) 2012年8月30日のフィールドノートから。

11) 2009年11月25日のフィールドノートから。

12) 2012年8月30日のフィールドノートから。

ットで提案することにした。具体的に、有機栽培に関する本を読み、殺虫ではなく除虫の方法で木を育てるやり方を勉強し、提案した。その結果、夫の父親は、農薬の使用を止め、木酢液など自然な方法に切り替えてくれた。Oさんは、日ごろのOさんの努力を知っている夫の父親が、Oさんの言葉を受け容れ、長年のやり方を改めてくれたことにとても感謝している。

そうした判断は、結局のところ、相談室を主宰する福井先生の判断ではないかと思われるかもしれないが、そうではなくあくまで母親自身の判断であるとOさんは説明している。Oさんによれば、あるとき、それまで完全に玉子を除去した食事をしてきたわが子に、少量の玉子の白身を与えてみようと思い、先生に相談したことがあった。Oさんは、これまでの経緯から、「32分の1個から」と考えたが、先生は「半分ぐらいええんちゃう?」と言った。Oさんは結局、32分の1個を与えたが、それでも子どものからだには蕁麻疹が出た。Oさんは、「半分与えてたら、アナフィラキシー起こして救急車で運ばれていたかもしれない」とふり返りつつ、「わたしは仮にそうでも、先生を責めない」と語っている。というのも、Oさんにとって、先生の役割は、あくまでこれまで蓄積された経験のなかから、「こうしたらよかったよ」という判断材料を示してくれることに過ぎず、そのなかから、自分の子どもに合うものを探して、実践していくのは、親としての自分だからである¹³⁾。

このように、相談室では、母親自身がみずから考え、実践していくことが何よりも重視される。その実践をつうじて作り出された身体は、支配に対し従順であるというよりは、むしろ支配に対し、能動的に働きかける身体ではなかっただろうか。

5-2 食事改善にまつわる苦労の消失

つづいて、実践を重ねるなかで、食事改善にまつわる苦労が変質したというMさんの語りについて考えてみたい。すでに述べたように、相談室の実践は、単に母乳を与えるのではなく、母乳哺

育と食事改善をセットで行う点に特色がある。通常、母乳哺育というだけで「大変」というイメージを持たれがちであるが、それに食事改善が加わることで、母親であるOさん、Mさんの負担はやはり大きくならざるを得ない。しかし、興味深いことに、実践を長くつづけていくうち、当初、苦労と感じられていたものが、苦労ではなくなったとMさんは語っている。

実践を始めた当初は、Mさんは、食材の調達に苦労することが多かった。Mさんは、教室に通うようになってすぐに、自然食の宅配を開始した。食べられる食材の多くは、野菜である。野菜しか食べないと、大きな鍋にふたが閉まらないぐらいいっぱい作っても、すぐにお腹が空く。宅配の人に、「こんだけの野菜、何するんですか?」と、驚かれることもあったという。

やがて、Mさんは、自然食の宅配を、3ヶ所をかけもちして利用するようになった。というのも、食べられる食材が限られているため、品薄になる季節など、どうしても手に入らないものがあるからである。こちらではシロ菜が手に入るがこちらでは入らないなど、いろいろと工夫して調達した。業者によって、一回ごとに宅配料がかかるが商品は安いところと、送料は無料だが商品が高いところがあったが、とにかくたくさん買うので、宅配料がかかっても、品物が安いところで多く買うようになった。それでも足りないときには、車で20分ほどのところにある、無農薬野菜の店で購入した。

そうしているうちに、Mさんは、どこに何が売られているかが、だんだんと予測できるようになった。また、欲しいものがみつからない場合には、誰にどのように働きかければよいか、わかるようになった。

コーヨー（注：スーパーの名前）のなかの一角に、有機の玉ねぎを売っている場所を見つけたとか、ちょっとした場所を開拓して買うようになって。普通のスーパーでも、意外にここ置いているなっていうのがあったりとか、そういうのをここ2、3年の間に、すごくわかるように

13) 2014年10月29日のフィールドノートから。

なってきた。スーパーに行ったらもう、聞いちゃうんですね。有機のものを置いていますかって、がんがん聞いちゃう。そしたらもう、探す必要もない。返事でわかる。¹⁴⁾

外食についても、宅配と同様、つづけていくうちに、苦ではなくなってきた。基本的に、小さい子どもがいるので外食をする機会は多くはないが、記念日などどうしても外食したいときや、趣味の音楽サークルの打ち上げがあるときなどには、食事制限をしても食事できるようなレストランを利用するのだという。先に電話をして、「これとこれとこれが食べられるんですが、これで料理できますか」と伝えて、料理をしてもらう。そうでないレストランを利用する際には、「これ、調味料は何を使っていますか」など、「普通だったら恥ずかしくて聞けない、こんなこと教えてくれるかなと思うようなこと」も、ためらわず聞けるようになったという。

また、旅行がととも好きだった M さんは、近くに自然食のレストランがあるところや、自炊ができるところ探して旅行をすることもある。「ホットプレート持参で、食材もいっぱい、がばーと積んで、持ち込んで」、実現した。相談室の卒業生が自然食を出すペンションをやっていると聞き、一週間ぐらい滞在したこともあった。食べられるものを事前に伝えておいたら、そのとおりにやってくれた。

このように、食材の調達から外食、旅行まで、通常、食事制限をしながらの母乳哺育をしていると不可能と思われるようなことがらについて、M さんは、「普通に簡単な気晴らしはできないが、リサーチして、ちょっと頑張ればできた」とふり返っている。フーコーが論じたように、権力に外部はないのだとすれば、M さんの語りにみられるような、支配された範囲内での自由の可能性について、考えていくことは重要であるだろう。

6 終わりに

本稿は、授乳を単なる個人的経験としてではな

く、ひとつの社会的実践として捉える立場に立ち、授乳実践への参与をつうじてもたらされる、社会関係の変容について考察を行った。題材として用いたのは、民間の母乳育児相談室に通い、助産師の指導のもと、完全母乳哺育と食事改善に取り組む母親たちの実践と語りである。

分析をつうじて明らかになったのは、実践への参与をつうじてもたらされる、社会関係の変容のつぎのような複層性である。

その実践は、第一に、現代社会においては、高度に個人化された課題として取り組まれる授乳という営みを、母親たちが「ともに行う」実践へと変える側面をもっていた。とりわけ子どもの皮膚アレルギーに悩む母親たちは、実践への参与をつうじて、個別に問題への対処をこころみていたときには得られなかったような、自信や確信を獲得していた。ただし、そうした自信や確信は、母親自身の多大なるコミットメントをつうじてのみ、得られるものではあったが。

第二に、その実践は、それまで個々の家庭で、漫然と行われていた食事の準備や授乳といった営みを、公的な明るみのもとに引き出す側面を持っていた。食物日誌や「母乳はうそがつけない」などのレトリックには、諸個人の生活を、ますます把握可能で、可視的なものにしていくのを助けるような側面があった。

このように、ひとつの実践の内部に、母親をエンパワーする側面と、母親を国家との関係性において隷属化させていくような側面が同時に見出されたことは興味深い。当該の実践においては、母親たちは、支配を積極的に受け入れる（自身が口にするものと母乳、子どもの健康とのあいだのつながりを徹底的に可視化させる）ことにより、環境問題のリスクに対し、能動的対処を行うことが可能になっていた。

加えて、その実践には、一定の排除もともなっていたことも指摘されねばならない。すなわち、その実践には、男性の参加は想定されていなかった。また、その実践においては、食事や母乳のことに興味を持てない、持たない層への支援は射程に入れられていなかった。

14) 2012 年 2 月 14 日のフィールドノートから。

今後は、そうした排除の問題、ならびに実践がもたらす帰結の複層性という観点から、異なるタイプの授乳実践についても検討を行っていききたい。

引用・参考文献

- 母乳育児サークル編（1986）『おっぱいだより集』メディア出版。
- （1997）『続 おっぱいだより集』メディア出版。
- ボウムスラグ, N. とミッチェルズ, D. L.／橋本武夫監訳（1999）『母乳育児の文化と真実』メディア出版。
- フーコー, M.／田村俣訳（1977）『監獄の誕生』新潮社。
- フーコー, M.／渡辺守章訳（1986）『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社。
- 福井早智子（1992）『アトピーっ子にしない 母乳育児BOOK』新泉社。
- （2010 a）「19 歳ギャルママのちょっと踏んばる母乳育児①」『食べもの文化』No.414、芽ばえ社。
- （2010 b）「19 歳ギャルママのちょっと踏んばる母乳育児②」『食べもの文化』No.415、芽ばえ社。
- （2010 c）「19 歳ギャルママのちょっと踏んばる母乳育児③」『食べもの文化』No.416、芽ばえ社。
- 林弘通（2001）『二〇世紀乳加工技術史』幸書房。
- 本田由紀（2007）『「家庭教育」の隘路 子育てに強迫される母親たち』勁草書房。
- 神原文子（2010）『子づれシングル ひとり親家族の自立と社会的支援』明石書店。
- 木村朗子（2009）『乳房は誰ののか 日本中世物語にみる性と権力』新曜社。

- 小林亜子（1996）「母と子をめぐる〈生の政治学〉——産婆から産科医へ、母乳から粉ミルクへ」山下悦子編『女と男の時空 日本女性史再考Ⅵ 溶解する女と男 21 世紀の時代へ向けて 現代』藤原書店。
- 三上剛史（2013）『社会の思考——リスクと監視と個人化』第一版第四刷、学文社。
- 村田泰子（2012）「母乳哺育と後期近代のリスク——環境問題のリスクを中心に」『関西学院大学社会学部紀要』115 号。
- （2013）「授乳の医療化とジェンダー——「母乳ダイオキシン騒動」と助産師の実践知」『女性学』Vol.20、日本女性学会。
- 鯨島輝美（2013）「「身体」の溶け合い」による母乳育児を基盤とした子育て支援——尼崎市・福井母乳育児相談室の事例」『集団力学』第 30 巻、集団力学研究所。
- 品田知美（2004）『〈子育て法〉革命 親の主体性をとりもどす』中公新書。
- 関良徳（2001）『フーコーの権力論と自由論 その政治哲学的構成』勁草書房。
- 脇田晴子（2010）「歴史の中の乳母によるアロマザリング」根ヶ山光一・柏木恵子編著『ヒトの子育ての進化と文化 アロマザリングの役割を考える』有斐閣。
- Blum, L. M. 1999, *At the Brest: Ideologies of Breastfeeding and Motherhood in the Contemporary United States*, Beacon Press.
- Wolf, J. B. 2011, *Is Breast Best? Taking on the Breastfeeding Experts and the New High Stakes of Motherhood*, New York University Press.

参考資料

- 厚生労働省（2006）「平成 17 年度乳幼児栄養調査」。
- 厚生労働省（2007）「授乳・離乳の支援ガイド」。

Social Relations Emerging from Infant Feeding: Practices of Mothers with Strict Diets while Exclusively Breastfeeding their Children

ABSTRACT

The aim of this paper is to examine the ways so-called ‘bio-power’ (M. Foucault 1976) works in the field of infant feeding in contemporary Japanese society. My argument will be based on research (fieldwork and interviews) that I carried out at a local, privately-operated breastfeeding consultation room in Amagasaki, Hyogo, from 2009 to 2014. The consultation room is run by an experienced and devoted midwife who specializes in breast massage and alimentary therapy. Based on the idea that what mothers eat go directly to their children via their breast milk, mothers with allergic children are encouraged not just to breastfeed exclusively but also to eat healthy and to be more knowledgeable about their food choices.

I will argue that the relationship of their practices to the workings of bio-power is ambiguous or equivocal: on the one hand, there is little doubt that their practices enhance surveillance at home. Through such technologies as the ‘*obento*’ system and ‘food diary’ as well as the rhetoric of ‘breast milk cannot tell a lie’, mothers are encouraged to engage in self-surveillance, even when at home alone. On the other hand, however, mothers acquire a certain strength or vitality through the very same practices. Especially in the context of increased food insecurity in infant food, it is important to note that these mothers successfully control such fear by fully committing themselves to the practice.

Key Words: infant feeding, practice, bio power